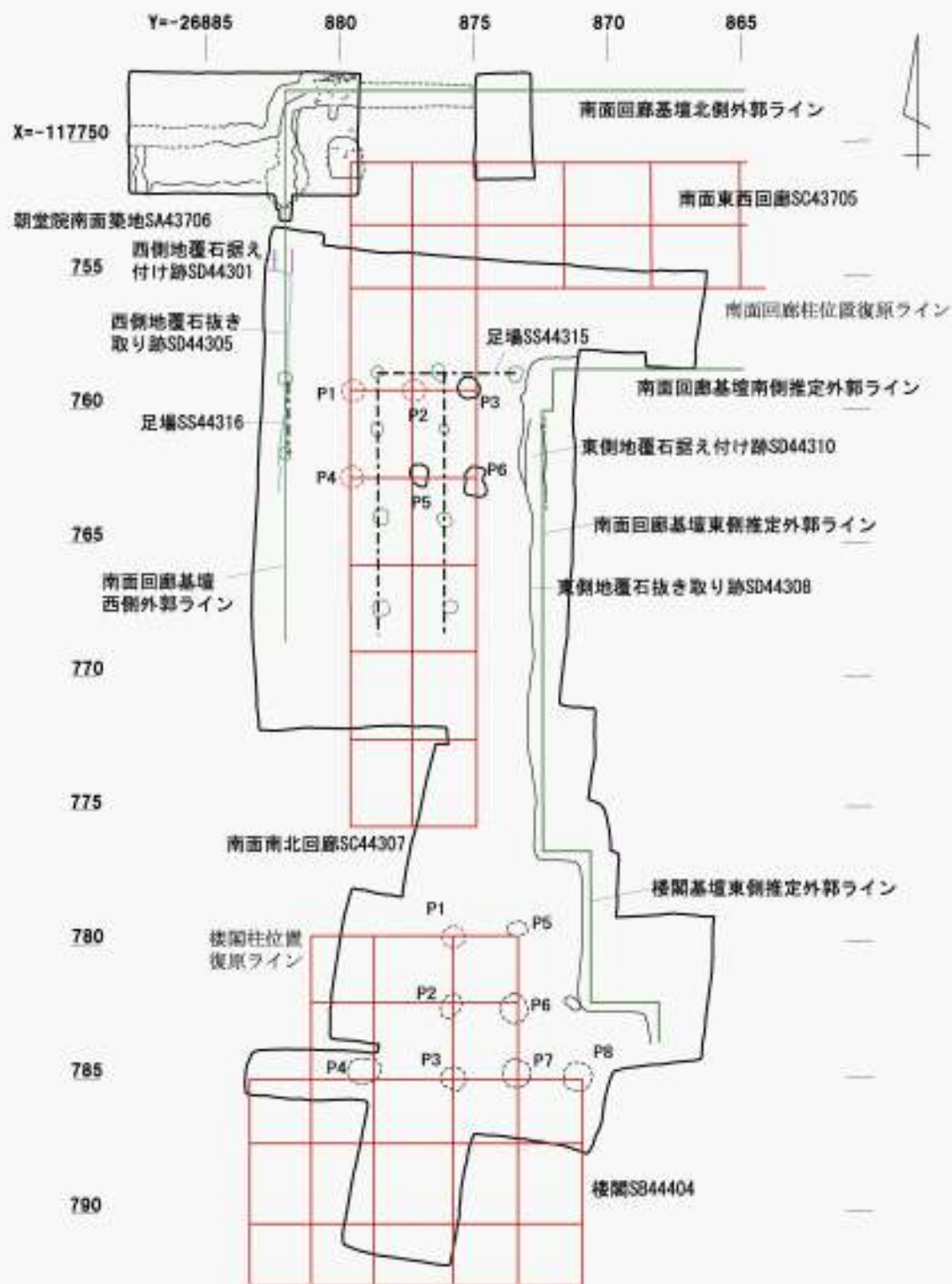


# 長岡宮「翔鸞楼」跡



向日市教育委員会  
(財)向日市埋蔵文化財センター



長岡京期の遺構配置図

長岡宮「翔鸞楼」は、平成17(2005)年10月、阪急西向日駅北西約30m地点の調査で発見されました。長岡宮朝堂院南面回廊がどのような形に作られているか初めてわかりました。見つかった遺構は、朝堂院南面回廊の南北に延びる部分の柱穴とその南端に設けられた礎石建物(楼閣)、これらの建物の土台となる基壇の地覆石を取り除いた痕跡、回廊を造る時の足場穴、そして朝堂院南面築地などがあります。

当時、この建物がなんと呼ばれていたかについては記録が無く判りません。そこで、平安宮の名称を借りて長岡宮「翔鸞楼」と呼称することにしました。

【南面南北回廊】 東西方向に延びる南面回廊から南に折れ曲がり、延びる回廊です。東西2間、南北6間の南北方向の回廊と推定されます。回廊の根石掘り方は3基確認しました。柱と柱の間隔は東西2.4m(8尺)、南北3.3m(11尺)です。この間隔は、東西方向の回廊と一致します。

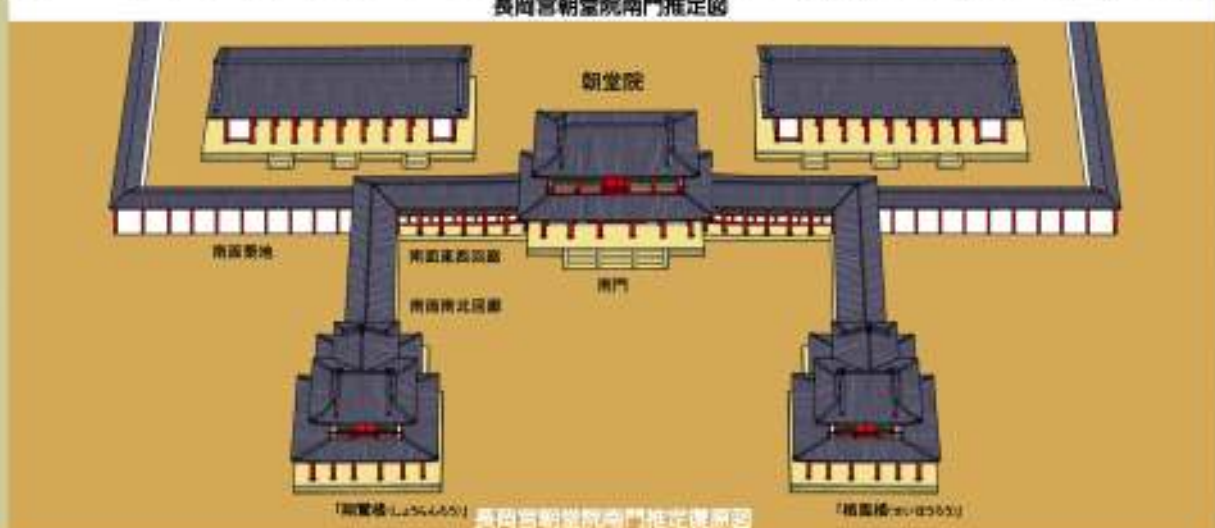
【楼閣】 礎石基礎を8基確認しました。楼閣の柱位置は回廊の柱位置とは一致せず、楼閣と回廊の中軸線を一致させたと考えられます。柱の間隔は南北方向が北から8尺、10尺、東西方向は東から、8尺、8尺、10尺です。基壇の出は10尺です。柱の配置や間隔から総柱構造の建物に復元できます。また、回廊基壇がそのまま楼閣の外周を巡ることから回廊と一連の建物とわかります。礎石の基礎構造は、整地後に上面から穴を掘り基礎地業(改良工事)を行うものではありません。朝堂院の前に広がる谷を埋る整地が一定終了した時点で柱基礎位置に礎を置き、さらに整地を進めた時点でもう一度礎を置く特殊な構造です。このように楼閣は、長岡京遷都当初に造られたと判断できます。回廊の先端に別の建物が付設される構造は、平安宮応天門の左右の楼構造と類似します。つまり、この建物は平安宮で翔鸞楼と呼ばれる楼閣に相当すると考えられます。

【回廊・楼閣基礎地覆石抜き取り跡】 長岡京廃都に伴い平安京で再利用するために基壇を解体し、地覆石を抜き取った跡です。回廊の東西両側で見つかりました。中には解体時に壊れて使えなくなった瓦などが埋められていました。

この発見により長岡宮朝堂院の南面回廊は、南門から東西回廊が延び途中で南に折れ曲がり、その先に楼閣を備えていたとわかりました。この建築様式は中国で「闕」と呼ばれ、平安宮応天門に引き継がれたのです。唐の制度や文化を積極的に取り入れた桓武朝の性格をより端的に示し、日本古代都城制を考える上で欠かせない成果といえます。

参考文献

- (1) 『新版長岡京発掘』日本放送出版協会 1984年
- (2) 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第54集 向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター 2002年
- (3) 『向日市埋蔵文化財調査報告書』第72集 向日市教育委員会 2006年





上:上空15mから見た回廊と楼閣(北から)  
 右上:回廊・楼閣基壇の東側の様子(南から)  
 右下:楼閣基壇東側の廃棄された瓦(西から)



上:谷を埋める過整地程の中で柱位置に基礎の石を置いています。(南西から)  
 左:楼閣の礎石基礎の様子。石の大きさや置き方などは柱ごとに少しづつ違ってきます。(東から)